

令和元年度実務実習の良い事例集 第Ⅱ期までの中間まとめ (抜粋)

薬学教育協議会

薬局実習

【外来通院患者を担当し、クリニカルクラークシップが実践できた一例】

- ・実習1週目より外来通院患者を担当させていただき、実習期間中、計6回、患者応対・服薬指導をさせていただいた。また、その患者について、学生カンファレンス（学生が担当患者についてプレゼンをする症例検討会）を2回行っていただき、参加していただいた指導薬剤師やほかの薬剤師、担当教員とのディスカッションを通して、多くの気づきが得られた。その中で、疾患毎ではなく、患者全体を把握した上で、患者の生活環境やEBM、服薬指導のポイントなどについて、理解を深め、薬物治療の提案を行った。実習生は、複数回に渡り、同一の患者と関わることで、患者の問題点をしっかりと捉えることができ、患者一人一人に合わせた薬物治療や服薬指導の重要性を学ぶことが出来た。
- ・問題点の立て方や薬物治療を評価していくプロセスを深く理解した。EBMやNBM、患者が置かれている生活環境を考慮した上で、最適な治療を提案していく重要性を学んだ。

【地域に深くかかわる薬局】

- ・地域に深くかかわる薬局薬剤師の姿を具体的に学生が体感することができた。具体的には、往診同行で処方薬の変更を提案する実習だけでなく、その後のフォローアップを学ぶ機会を与えた。長年吸入デバイスを使っていた患者に再指導する必要性と操作のピットフォールになりやすい箇所を考えさせ、その対策を考えさせた。
- ・薬の情報だけでなく、患者さんの様子から得られる情報を大切にする。会話の中から得られる患者さんの症状変化や吸入薬や点眼薬の癖など、患者個々が弱い部分を重点的に指導する必要性を感じ、それを実践することができた。医師と同行することで医療者同士の情報共有がスムーズになり、患者の症状の変化に対応しやすくなると分かった。薬価や規格、薬のエビデンスなど薬剤師が詳しく知っていることを医師が処方するときに助言し、より良い薬物治療を実践できた。

【近隣のケアホームでのチーム医療の経験について】

- ・本薬局は高齢者複合施設の一部であり、ケアホームやクリニックと隣接している。そのため実習期間中、毎日のようにケアホームの健康管理室で入居者全員について、医師や看護師との申し送りに参加することができ、また、回診にも同行することができる。薬局実習であるが、病院実習のようなチーム医療の経験をすることのできる薬局

であり、薬局薬剤師の業務内容についてより深く理解をすることができた。

- ・地域に貢献する薬局薬剤師の役割について深く理解した。薬局内で入居者の介護記録、血液検査データ等も閲覧することができ、入居者のモニタリングを行い、多職種との情報共有を実施し、チーム医療の重要性について多くのことを学んだ。

【地域健康支援活動】

前年度まで実習施設の課題として、患者・来局者向けの「病気や健康」に関するテーマを学生が選択して情報発信のための掲示用ポスターと配布資料を作成していた。今年度より地域医療への貢献を視野に入れて、地域住民に対する情報発信となるようテーマを変更した。I期の実習生については全員が、従来の掲示用ポスターと配布資料作成に加えて、地域住民を対象とした講演会での発表の機会を得ることができた。この体験をとおして、アイコンタクトの必要性、相手に合わせた説明の仕方、理解を確かめながら説明することなど、約1時間と限られた講演会の時間内でコミュニケーション能力の重要なポイントに学生自らが気づき、成長を実感できた実り多い体験ができた。

【地域医療の現場体験を含む薬薬連携】

地域住民向けのセミナーを開催しているが、その講師の一部を実務実習の学生に担当させることで、地域薬局の役割を経験する機会を設けている。

【体験に基づいた災害医療と薬剤師を学ぶ】

東日本大震災時の薬局薬剤師の活動を体験者から学び、震災当時の手書き処方箋など残された記録を見せてもらうことで、学生は当時の様子が鮮烈に脳裏に浮かんできたと言う。その場になくとも、学生が体験型の実習を実感出来た良い実習であった。

【実習生の成長に合わせたオーダーメイド的指導と背負いすぎない自然体での実習環境】

- ・実習生の成長をこまめに把握して、できていない内容や実習生自身が改善案を見出している事項について、重点的に割り振るような指導の工夫があった。
- ・過剰な期待やプレッシャーなく、「今は」できない、ではどうすればできるようになるか、の気付きを促し、それをトライする環境を提供してもらえる。
- ・薬局や提携している施設では不十分な項目について、正直に大学へと相談してもらえる判断の良さ。何が実習可能で、何が不可能かを明確にしてもらえることで、続く病院実習で重点的にお願いしたい事項を、事前訪問で病院側に伝える事ができる。

【指導薬剤師と学生の二人三脚】

- ・実習期間中、学生が理解できたこと、できなかったこと、実践できたこと、できなかったこと、できなかったことに対する改善策についてこつこつと丁寧に記載し、指導薬剤師がそれに答える形で指導薬剤師としてのコメントをほぼ毎日記載されており、学習成果を積み上げていく様子が日報、週報、振り返りから見て取れる内容であった。
- ・薬剤師として生涯学んでいく態度やPDCAサイクルのような方法論について11週一貫して続けることができた。

【実習報告会の繰り上げ実施】

これまで実習最終日だった実習報告会について、一週間早めて実施された。根拠として、実習での取り組みを発表することで修得できたことを残りの期間でさらなる臨床技能の向上に活かすことが可能であるとの判断からであった。他県薬剤師会でも検討中である。

病院実習

【継続的な服薬指導】

代表的8疾患が取り入れられたため服薬指導の件数ばかりに気を取られていたが、そうではなく、一人の患者が入院してから退院まで、持参薬確認、初回面談、治療計画、副作用確認、退院時指導と継続的な服薬指導を体験できた。

病棟で薬剤師が働くには、膨大な薬の知識が必要であることと、臨機応変に対応できる力が必要。看護師が薬の説明を行っていることもあり、薬剤師にできることは何か改めて考えさせられた。医師への疑義照会を通して、患者を守るための最後の砦が薬剤師であると感じた。

【褥瘡チームにおける薬剤師の役割を学ぶ】

病院実習は、様々なチーム医療に参加しながら学べる特色がある。褥瘡チームもその一つであるが、薬剤師が活躍している施設は多いとはいえない。その中でも、薬剤師向け褥瘡研修会の定期的な開催など、専門薬剤師育成に努力している施設であり、実務実習においても褥瘡の基礎から褥瘡回診同行まで、褥瘡チームにおける薬剤師の役割を実感できる良いプログラムとなっている。

【病院薬剤師業務全般における充実した実習内容及び病棟業務の実践】

病棟業務の実施及びチーム医療への参画を通して、患者さんへの関わり方、他の医療従事者との協力関係の構築などの重要性を学び、薬剤師として必要な知識の向上、コミュニケーション能力を深めることができた。また、実習終了後に学生から、「患者さんだけでなくその家族の人生までも考えてあげられるような、心から寄り添える医療人になりたい」という言葉を聴くことができた。

【新コアカリキュラムに対応した発表会の評価方法の変更】

実習期間中に2回発表会（症例発表会、最終発表会）を行っているが、新コアカリキュラムの実務実習の評価が概略評価に移行したことに合わせて、発表会に参加した教員・薬剤師が記入する評価も、独自のルーブリック評価表を作成して今期試行してみた。ルーブリック評価表は今後も改良していく予定である。

【病院薬剤師も参画した地元薬剤師会との学生実務実習にかかわる取り組み】

「地元のA薬剤師会」では、「A薬剤師会実習生交流会」が実施され、実習生、薬剤師が参加している。病院Bの病院薬剤師も参加しており、病院実習の開始以前から薬局実習の学生の顔と名前を憶えていた。病院・薬局の指導薬剤師および各指導薬剤師・実習生が、顔の見える関係でいるのは、実習生にとってとてもよい環境と思われた。

【透析医療における多職種連携実習】

実習期間中に、透析室の見学実習を行い、臨床工学技士から透析医療に係る説明を受けた。透析回路の整備、抗凝固薬の適正使用などについて教わり、病院内の多職種役割を体験できた。

【多くの患者応対を体験する体制を整えている実習施設】

ほぼ毎日病棟に行く時間があり、多くの患者応対を体験させる体制が整えられている。多くの患者に接することができ、自分の自信にもつながったと実習生はコメントしている。